

りしんねんだいき

離神年代記

第四話

透子

秋本カイ

画 戸谷展洋



眼球の夢

笹原由宜は、悪夢の中にいた。木の上の眼球。

子どもの頃から、繰り返した見た悪夢である。

汗と糞尿にまみれ、押入れに閉じ込められていた時期。

そこで生まれた悪夢だった。

闇の中では、鼠とゴキブリと自分の区別もつかない。

それでも、初めのうちは、ひとけ人気のない部屋に出てみたこと

もあった。部屋も押入れとたいして変わらぬゴミの山。埃と、もとが何とも分からない汚物に満ちていた。その中に、悪夢

の原点となるマンガが埋もれていた。本・新聞・雑誌、およ

話は一人の女が結婚相手の実家を訪れる所から始まる。山

の奥深くの村。やっと辿り着いた女は、道で苛められている
十五、六歳の少女を助け、優しい言葉をかける。

実家には、ただ一人義父が暮らしていた。少女を助けた話
に、眉をしかめる。少女の家は村八分になっており、彼女は
その家の最後の生き残り、関わってはならないと言う。

その夜、不気味な唸り声が、村中にこだます。翌朝、野犬
らしきものの被害にあった家を取り囲み、村人たちが話し込

そ活字とは、縁のない部屋に、誰かの忘れていった週刊誌。
字の読めない由宜の気を引いたのは、おどろおどろしい絵で
描かれたマンガだった。

日の光のある時に、何千・何万回も眺めた。一コマ目、山
が描いてある。二コマ目、見上げる女の顔。次に、バス。

木々。そして、道。すべてが、記憶に刻みこまれている。や
がて、それらは絵の羅列ではなく、一つの小説のように、前
頭葉の記憶部位を変化させた。

が、悪夢は原点のままだ。なぜか再構築されたストーリー
からではなく、あくまで二次元の世界が、そのまま血肉を持
って、三次元へと変貌する。

笹原は、ヘリの振動を感じながら、微かに寝返りを打った。
んでいる。そして、よそ者の彼女の姿をみると、一様に黙り
込む。

一緒に来るはずだった夫から

「やっと、仕事の片が付いた。最終列車には間に合うが、村
に着くのは夜中になってしまふ」と連絡が入る。

その夜。裏木戸が破られ、何物かが侵入した。義父が獣に
噛み殺された。その獣と目が合う。あの少女だった。四足の
獣は、どうにか体を起こし、二本足で立って、女に訴える。

自分はもう人間ではなくなる。その前に、優しい言葉をか

けてもらったお札が言いたかった。

外に物音。少女の目から理性は消え、獣と化す。玄関口に着いた女の夫に襲いかかる。女は夫からその獣を引き離し、どうにか納屋へと逃げ込む。突撃してくるけだものを、うちから、心張り棒をかけて懸命に押える。やがて、攻撃は止むが、夫は怪我を負っていた。女はその時、スカート裾に、なにかヌラヌラとしたものが引っ掛つていることに気付く。それは、溶けかけた手だった。

静まり返った納屋で、ぼつりぼつりと、夫が村の秘密を話す。ここは、平家の落人村である。近親結婚の多い、閉鎖された村には、奇病があつて、村人はそれを恥じていた。二十歳ぐらいで発病する。発病すると二、三日で死んでしまう。獣と化して、村人を襲い、やがて、塩をかけられたなめくじのようにあとかたもなく溶けて消えてしまうのだと言う。

あの十五、六に見えた少女も小柄なだけで、もう二十歳のはず。おそらく、昨日発病したのだろう、と夫は言った。

「誰も助けないの？ 医者にみせたりはしないの？」

夫は、思いがけない言葉を聞いたような表情を浮かべる。

そんなことは考えてみたこともないらしい。義父のように、何人もの人間が殺され、村中が被害者の家族である。そして、病気は遺伝で、あの一族が消えれば、すべては終わるのだと考えている。決して子孫を残させない。この村に閉じ込めた

まま、最後の一人が消えるのを待つのだ。

夫は、出血がひどく、意識を失う。女は、助けを呼ぶため、高窓から外を窺った。

外は闇ではなかった。見事な月明かりに冴え冴えとしている。闇は、大木の中。木の影は、黒々とそびえたち、高枝に光る目があった。獲物を狙う獣の目。爪を木肌に食い込ませ、低く身構えているであろうけだものの目。

一度見詰め合ったら、もう逸らす事は出来ない。逸らした刹那に襲いかかって来るのだ。高窓のガラスを突き破って、咽喉元に喰らい付くに違いない。

キリキリと張られた緊張の糸。脈打つ鼓動に、ガンガンと頭が響き出す。視界が翳みそうになるのを耐えた。

…… 朝が来た。

母屋の惨状に気付いた村人が、納屋へと駆けつけた。助け出された女は、朝の光の中で、木を見上げる。

高枝には、ふたつの眼球だけが、残っていた。

笹原は、あの日あの部屋から、助け出されて、一度も部屋に戻ったこともなければ、そのマンガを見たこともない。大量に消費されていく週刊誌のつまらない数ページのマンガだったのかもしれない。もう、彼の記憶以外のどこにも存在し

ないのかもしれない。

昼間、彼はストーリーの辻褄の合わなさや、ご都合主義な展開を馬鹿にすることもできた。

しかし、眠りの中では、なんの主導権も、理性も、持てない。納屋の中から、眼球をみつめる恐怖だけに支配される。それも、獣に追い詰められた恐怖ではない。闇の中で、少女の体が徐々に溶けつつあるという恐怖だった。少女を救いたのでさえない。ただ、ただ、消える恐怖。相手でも自分でもない。消える……消えていく……

「透子は違う！」

口に出さずにはいられなかった。

明彦が振るった力を見た時に、なぜ透子を思ったのか。

透子を思った自分は、なぜこの悪夢を見たのか。

忌々しかった。自分の中に、透子と悪夢をつなげるイメージがあると思うと、歯噛みするほど悔しかった。

「ヨリ」

後部席から海老沢のいぶかしんだ声がかかる。

「なんでもない」

笹原の声は疲れていた。

病人の搬送用に作られたヘリである。後部席には、眠り続ける友康と眠らない明彦がいる。そして、海老沢悠一が、付き添っていた。連絡が入ってすぐ、海老沢を同乗させて、友

康を迎えに飛び立った。そして、指示された廃校に着陸。その直後に見たのが、あの光景である。

今、自分が一番動揺しているのかもしれない。笹原はそう思う。

太陽の赤みが消えた夕闇の大地で、明彦は自分に、頭を垂れてきた。

しかし、友康が戻って、ヘリの後部席に寄せられてからは、しがみつくように、友康の傍らを離れない。

『手に入れてしまった』

その思いが錯覚ならその方がいい。

もし、このまま友康が目覚めなかったら……

明彦を手に入れてしまったら、何が始まるのだろう。

人の心を読む、未来を見る。すべてを、偶然や、今見えているものからの推測と決めつけることも出来る。現に、大方の超能力は、信じる人には、本当だが、疑う人間には、贋物であり、科学であり、偶然であり、作為である。明彦の、あの、人を死に至らしめる力でさえ。

目には見えない、感じるだけのものほど、錯覚であったと自分に言い聞かせ、時の向こうに埋もれさせてしまえば、現実という壁が遮ってくれる。

しかし、あの光景はどうにもならない。遮るものとしてない平地ひらちでの、一本の木、一人の女の消失。

そこに働いた力は、何なのだろう。

どこまで広げられる力なのだろう。

一つの町、一つの都市、一つの国、一つの大陸、一つの惑星。

笹原は、頭をシートに預け、目を閉じた。疲れていた。

「ヨリ」

海老沢悠一は、しばらく待って、もう一度声をかけた。返事はない。眠ったのだろう。ほっとした。

『透子』という名が、笹原から発せられた時、フラッシュバックのように、あの日の鋭利な切っ先を見た気がした。身の縮む思いだ。

これから起ころうとしている何かに身構えずにはいられない。

三時間前、突然、友康が倒れたと呼び出され、ヘリに詰め込まれた。山間の廃校に着地するという。高度が下がっていき、大木と明彦らしき人物と女性の姿が見えた。ヘリを出ようとしていたときにも、視界の中には、それらがあつた気がする。だのに、笹原に少し遅れて、地に降り立つと、広がる空間には、明彦がぼつねんと立っているだけだった。離れた所に小さな少女がいる。笹原は、すぐに明彦に近づいて

行った。

(…さっかく…?) としか思えなかった。

明彦の肩を抱いて、笹原が戻って来る。

「今見たことは誰にも言うな」

と釘をさされた。

自分が何を見たのかを理解した。

錯覚ではない。やはり、木も人も消えたのだ。

そんな時でも、笹原は自分を見失わない。

「すぐに、友康を迎えに行ってくれ。病院への連絡はついてる。救急車も手配済みだ。今、ハイヤーがここに来るから、それに乗って行け」

海老沢は言われた通りに動いた。病院では、自分は樋山友康の主治医であり、ヘリで東京の病院に搬送すると説明した。笹原の用意は周到で、なんの滞りもなかった。

廃校に戻ると、少女はいなかった。祖母が迎えに来たのだと言う。思わず、

「行かせたのか？」と訊ねた。

「当たり前だろう」

「それで？」

自分でも、『それで?』というのが、何の質問なのかよくわかっていない。

だが、笹原は、すぐに答えた。

「操縦席のパイロットは、何も見ていないし、気付いてない。あの子は、どうしようもないさ。どうしようがある」

「見たのか」

「見た」

「何歳だろう？」

つまり、話にどれだけ信憑性のある年なのか、ということだ。

「一言も口をきかなかった。怯えているという風でもない。

ただじっとしていた」

（少女は理解していると言いたいのだろうか？）

笹原の考えていることが、わからなかった。

友康を、ヘリに乗せると、救急車は引き返していった。中では、もう明彦が友康の体に縋り付く様にしゃがみ込んでいた。引き離して後部座席に座らせようとしたが、無駄だった。

海老沢の心に引つかかったのは、明彦を見る笹原の目だ。

明彦を凝視する目。

何を見ているのか？ 心をどこかの世界に繋いでしまった

かのように、虚ろで、深い、そして、恐い目だった。

透子の話

月の命日には、一時間の道のりを歩いて墓参りする。

丹精込めた庭の花を手に、透子のことを思いながら、笹原弓子は、ゆつくり道を歩く。思い出の中には、若い、夫、笹原原由宜もいた。

いっしょに暮らし始めると、戸惑うことはたくさんあった。何より由宜は、日々変化していく。ホームレスから、フリーター、店長、異例の本社勤務。それが必要とあれば、彼は努力を惜しまない。いや、努力できるというこの環境がうれしいのかもしれない。押入れの中で止まっていた時間が、動き出したのだ。

性格も変わっていった。少なかった言葉数が増え、饒舌になった。そのほうが、生きていきやすいと感じたのだ。冗句を交えた軽い会話、そして仕事はきちんとこなす。そんな人間でいることが、人間関係を構築していきやすいことを学んだ。

彼の知能と意志の力は、自分をコントロールできた。深い部分にさえ踏み込まなければ。

もうひとつ、由宜の特異な部分は、その不思議な記憶の形にあった。もちろん、彼の生まれてからここまでの人生を考慮するなら、それは不思議ではないのかもしれない。が、弓子にはいつもそれが不思議に思えた。

夕食後、テレビの野球中継を観ながら、

「野球って九人でやるんだよね」

由宜が尋ねてくる。

「そうよ。もちろんベンチにはサブのメンバーが控えてるんでしょうけど」

弓子が答える。

それきりテレビに見入っているのかと思ったら、また質問が飛んでくる。

「サッカーって十一人だっけ？」

野球もサッカーも男の子にはポピュラーなスポーツだろうに、由宜には経験がない。中学のとき、学校には通ったが、手足は何年も折れたたんでいた後遺症で、やっと年齢並みに動けるようになったのは、卒業の頃だった。

「そうよ」

弓子は剥いた梨を手に、由宜の脇に座った。

いつもの何気ない動作で、由宜の手が弓子の腹にのびてくる。かなり目立つようになった腹をそつとなでる。

「本当に女の子なのかなあ？」

「男の子の方がよかった？」

弓子が心外そうに切り返す。

「しー！」

由宜は唇に人差し指をあてる。

「まずい、聞いてるよ」

お腹を指差す。

「えーっ！ 本当に男の子の方が良かったの？」

「会社の人が、女の子は絶対父親を嫌うんだって言った。DNA的にそうできてるんだって」

「なにそれ？」

「なんだろう？」

「よっちゃんは、そうやって人の言うことをなんでもよく覚えるし、真に受けるから、会社の人もおもしろがって、いろいろ言うのよ」

「そうかなあ？」

「で、なに？」

「なにつて？」

「野球か、サッカーでも始めるの？ それとも、この子を野球選手にしようとも考えていた？」

弓子の問いに由宜が向き直る。

「違うよ、赤ん坊の名前を考えてたんだ」

「野球の九人とサッカーの十一人から？」

「すごい」

「まさか間をとって十子とか」

「すごすぎる」

「ほんとうなの？」

「うん、十子っていい名前じゃないかなあ。これって、バスケットだったら、二チーム分。ゲームができる」

「でも、バレーボールやるには中途半端よ」

「そしたら、僕たち二人がはいればいいさ。パパチーム対ママチーム」

「変！」

弓子が異を唱えても、全然耳を貸す様子もなく、由宜は悦に入っている。

「十子、九太郎、八重子、七海、六太、五郎。いいだろう。」

カウントダウンだよ」

「私に十人産めってこと？」

「孫に繋がってつてもいい。四ん子、三津子、次郎、太郎。」

そして、みんなで歯磨いて」

「なあに、それ！」

弓子は笑い転げた。

「ご飯食べてなら、まだ……、まだしもね、わかるような気もするけど、なんで、歯磨いてなの？」

「だって、思いついちゃったんだ。みんなで並んで歯みがいてるとこ」

「そのうえ、七番目、よんこって名前ひどくない？」

「だから、思いついちゃったんだって！」

二人の会話はとりとめなく、他愛なかった。

ただ、二人につながる未来を話すことが楽しかった。

誕生は、梅の咲く季節だった。

「白雪姫じゃ、やりすぎだよなあ。じゃあ、白雪っていうのはどうだろ？」

廊下からガラス越しに新生児室の赤ん坊をながめながら、由宜は相変わらず名前を考えている。

「看護婦さんっていうのは、毎日毎日赤ちゃんを見てるんだぞ。それで、こんなに色が白くて可愛い赤ちゃんは見たことがありません、ていうんだから、本当にそうなんだよ。親の欲目じゃないよ」

「だから、看護婦さんのお世辞。あなたのは、親バカ。白雪なんてつけないでね。思いつきり色黒にでも育ちあがったら笑いもんだわ。十子の方がまだまし」

弓子の物言いに由宜は膨れっ面だ。

「まだまし、はないだろう！ 一生懸命考えたのに。待てよ、いいこと思いついた」

「なに？」

「十番目の十じゃなくて、透き通るの透の字にしよう。それで透子だ。将来は透き通るような美しい美人だ！」

「美しい美人じゃなくて、透き通るような肌の美人でしょ」

「それでいいね」

小さな、唇、爪、耳の穴、由宜は飽く事なく眺めて、感心していた。

「こんなに小つちやくても、ちゃんとあるんだからすごいよ！」

「あたりまえでしょ」

一日に何度もそんな会話を繰り返した。

「鼻くそだよ、鼻くそ。こんなに小つちやい鼻の穴なのに生意気だなあ」

「あたりまえでしょ」

弓子は、そんな由宜を見るのが、楽しかった。

三歳まで、大病することもなく、健康に育った。

初め、右手の小指の爪が、妙に柔らかい感じがした。気のせいかもしれない。ある朝、由宜が透子の右の小指に爪がないと騒ぎ出した。すぐに病院へ連れて行った。

透子は、弓子の私生児として届けていた。由宜は、戸籍や住民票に触れることを嫌がった。居場所が分かれば、ひどい目にあわせられると言った。由宜への虐待を知っているだけに、深く考えることなく、その言葉に従った。

偽の履歴書、偽の経歴、由宜自身うまく世間を騙し遂せると思っていた。

が、これだけはだめなのだ。と観念した。観念するしかなかった。

透子の右手から小指が落ちた。

若い何の力も持たない二人だけでは、透子を守りきれなかった。

由宜が、海老沢病院に戻ると言い出した。

弓子は、由宜が海老沢病院に引き取られていたのは、患者として運びまれたせいだと思っていた。海老沢病院の院長が息子と同年の身寄りのない子を不憫に思い、世話をしている程度に考えていた。

だから、由宜とともに透子を連れて訪ねた時、海老沢病院から、隣接する大きな屋敷に招き入れられたのには、驚いた。近所に住んでいたのも、その森の家の存在は知っていたが、そこに人が住んでいるということはあまり考えていなかったような気がする。

奥の間に着くまでに、何人もの使用人を見かけた。長い長い廊下だった。庭というより山寺のようだ。隣接する建物が

全く見えない。通された日本間も、寺のお堂のように思えた。床の間には、平たく潰したような漢字二行のいかめしい掛け軸が掛かっていた。水盤に生けられているのは、見たこともない白い花だった。

しばらくすると、瘦せた、しかしどこか人を威圧するような男性が内庭の方の廊下に立った。開け放たれた敷居を踏んで入って来る。年は、老けて見えるが、もしかしたら、弓子と十まで違わないかもしれない。三十代中盤であろうか。

「由宜、いまさらなんだ！」

男は、なんの挨拶もなく、弓子に目を留めることもなく、由宜を怒鳴りつけた。由宜は、そうしたことには、慣れた様子で臆した風もない。

「娘が生まれました。僕の娘です」

「籍はどうした？」

「入れていません。でも、僕の娘なんです。病気です。治したいんです」

由宜の答えは、真摯で、率直で、簡潔だった。

「治すために、どうしたい？」

「援助して頂きたいのです」

男は床の間の前の座布団に座ることもなく、立ったまま返答した。

「わかった。海老沢にできるかぎりのことをするように言っ

ておく。あそこで埒が明かなければ、もつといい病院を探させる。それでいいか？」

「ありがとうございます」

無礼な男に、由宜は丁寧な、いやそれこそ慇懃無礼に、というべきか、畳に両手をつけて深く頭を下げた。

「そのかわり……まず、籍は入れるな。お前はわたしの目の届く所にいろ。こんな、突然子どもを連れ戻ってくる事のないようにな。二度と逃げ出すな！」

男は結局、弓子も透子のことも、まったく視野に入れることなく部屋を出て行った。

「ごめん」

なぜか由宜が謝った。

アパートの部屋に戻って、透子を寝かしつけた。由宜は、テレビの前に座っていた。ぼんやりしていた。話しかけようかどうか迷いながら隣に座ると、抱きついてきた。その唐突さに、二人畳に転がった。由宜はそのまましがみついている。

「重いなあ」

極力いつもの口調で、声をかけても、応答はない。

この重みは、由宜が今日必死で耐え続けた心の重みだとわかった。ピリピリとした、痛いほどの緊張が彼の筋肉を強張らせている。

自分の迂闊さが悔やまれた。いつだって、由宜は透子のために、最善を尽くしてきた。その彼が、透子を私生児のままにしていたのは、心の底からあの白居家に近付きたくなかったからに違いない。そこへ足を踏み入れることを、もっと深く受け止めるべきだった。態度に見せなかつただけで、ずっとあの家に助けを求めに行かねばならない日を考え続けていたのだろう。

「ねえ、透子はよく泣くけど、いい子だよ。よっちゃんは、泣かない子だったんじゃないかな。」

だから、いいよ、大人になってからだって、泣いても」

由宜は、体を起こして、畳にごろんと転がった。

「あの偉そうな御仁が、白居嘉一郎。僕の叔父にあたる。白居家の当主だ。彼の父親、忠保が妾に産ませたのが、僕の母親なんだ」

「あなたのお母さんとさっきの人は腹違いの姉弟ってことね」

「その前の代の白居忠保っていう人は何人も妾がいたし、子どももいたらしいんだけど、小さいうちに死んじゃって、今生きているのは二人だけなんだそう。僕の母親は行方不明だから、僕にいろんな相続するものがあるらしい。僕がみつかつて、戸籍がなかったから、それを作るときにも、ひどくもめたって聞いている」

この説明は、ずいぶんとオブラートに包まれているのだろう。由宜は、物事を客観的に話す人間だ。そして、平静を装いたいとき、それは著しい。嘉一郎という人物の態度は、自分たちを人とみなしていない。

由宜は、母親によってあの押入れで殺されようとしていた。その過酷な運命を、やっと逃れ出てきて、次に出会った身内が嘉一郎であったのなら、それは、由宜にとつて何を意味するのだろうか。由宜と出会ったとき、彼はホームレスになっていた。餓死寸前から、やっと手に入れた暖かい寢床を投げ捨てて。

なぜ、再びすべてを手放したのだろうか。

由宜は、仰向けのまま天井を見つめ続ける。手負いの鹿が、自分の傷を見ないために、遠く首を伸ばして、横たわっているようだった。

泣いていいと言いながら、涙を零しそうになっているのは、弓子の方だった。

それからの生活はまるで、嵐の中に放り出されたようだった。

海老沢病院脇の小さなアパートに引っ越した。由宜は、嘉一郎の会社に勤め、仕事以外のすべての時間を透子の為に使った。海老沢病院でたくさん検査をした。次に、いたると

ころの専門医の門を叩いた。

何もわからなかった。わからないまま、右手からすべての指がなくなり、左手からも。

小指・中指・薬指・人差し指・親指と、無くなっていった。

四歳の誕生日の次の日、右の手首に水泡のようなものがたたくさんできていた。

手首がポロリと落ちた。

足の指が無くなり始めた。

まだ、透子は五歳だった。

明け方、病院からアパートに帰ると、電気を点けたまま、専門書に埋もれて眠っている由宜がいた。起こすと、食事もせずに、着替えて家を飛び出して行く。嘉一郎は、由宜が彼の会社に勤めている限り、援助すると約束していた。

海老沢悠一と病院の研究室にいる時間も長かった。二人でよく喧嘩かと思うほどの議論をしていた。

「どこからそんな荒唐無稽な仮説を引っ張り出してきたんだ」

「確かめてみる」

「だって有り得ないだろう！」

「有り得ないと実証できるか？」

「馬鹿馬鹿しい、非常識だ」

「常識なんかには、価値はない」

「時間の無駄だ」

そこを突かれるのが、由宜には痛い。不機嫌な顔で黙り込む。

弓子は、そつと中に入って、ドアを閉めた。海老沢が気付いて、由宜に合図する。夜食のおにぎりを受け取ると、由宜は仏頂面のまま、すぐに研究に戻ってしまう。海老沢の方がずっと愛想が良かった。

「喧嘩をしてるわけじゃないですからね」

そう言って、頭を掻きながら近付いてくる。

「もうこの分野じゃ、とてもヨリには勝てない。とんでもない話ですよ。仮にも俺は、医者だつてのに！でも、俺の頭が悪いんじゃないですからね。日本中捜したって、もう奴に勝てる医者はいないですよ」

六歳になった。入学の時、透子は車椅子だった。右腕と左手首はなかったけれど、足は両方とも、足首から先がまだ半分以上残っていた。

由宜は、国内ばかりではなく、海外のシンポジウムにも、出かけて行くようになった。どこに行っても、同じ病気の患者がいて、その学会や患者・家族の会がある。

「一体なんなんだ。病名がない。どんなに調べたって、出てこない。人間が初めて出会う病気だって？　なんで、透子なんだ？　なんで、そんな……」

由宜の手を包むと、その拳は、籠められ過ぎた力に震えていた。

小学校三年生の終わり、学校に通うことは、断念した。足が無くなったことは仕方ないにしても、聴覚・視覚・嗅覚が衰え始めた。

透子の症状が、由宜の焦りに追い討ちを懸けて行く。

深夜、玄関の音が鳴る。慌てて出て行くが、靴を脱ぎかけた由宜はすでに、上がり框で眠ってしまっている。肩に手をかけると、薄く目をあけた。

「なに？」

由宜が訊ねる。何を訊ねられたのか、わからなかった。

二、三回そんなことがあって、由宜の目に映っているのが、下駄箱の上の一輪挿しであることに気付いた。

「これはね、マーガレット」

「ふうん」

そのまま寝込んでしまう由宜。起こす手立ては見つかからないけれど、その時のほっとした顔がうれしかった。

由宜は、もう外に探すことを諦めた。研究に没頭した。なぜこんなことが起こったのか？　娘の体の中で何が起こっているのか？　会社と海老沢の研究室の往復で暮らすようになっていた。

何度か出社していないという電話を受けた。研究室に行く、すぐ側で声を掛けても聞こえないほど、実験に没頭していた。

そのうちさすがの嘉一郎も諦めたのか、長期休暇扱いとなつたらしい。それでも、治療費や由宜の行っている研究の費用を請求されたことはなかった。

目や耳を失った透子が次に無くしたのは、排泄器官だった。アパートでは、どうにも対処できなくなって、やむなく海老沢病院に移った。入院というのは違った。昔、由宜の使っていた部屋に機材を運び入れて、住むようになった。生活費だけでも、病院の売店で働いた。

ある日、由宜が酔っ払って帰った。おそらく、酒というものを飲んだのは、その日が初めてだったと思う。帰ってくるなり、ソファに倒れこんで動かなかった。

一間のその部屋には、窓際に透子のベッドがある。外界を認識する入出力器官を次々と失った透子。

胸に、『おやすみ』と書き、頬にキスした。

「おやすみなさい」

口という透子の出力器官が答えた。

ソファに横になったまま、由宜の耳がそれを聞いている。

しばらくして、由宜に近付くと、何も言わずに、低いガラステールの上のものを指差した。近付いて眺めても、それが何なのか、理解出来なかった。

「実験用のマウスだ」

そう言われて、もう一度じっくりと見直して息を呑んだ。

それは、確かにマウスなのだろう。あまりに形状が変わっていて気付かなかった。まるで、鼠の部品のようだ。顔が無く、手足が無く、下半身も消えていた。気まぐれな神様が、創っている最中で投げ出してしまったような、不思議な形状。奇妙な光景。

確かな、鼠の死骸。

「透子もいずれそうなる」

由宜の声は、擦れて、乾いていた。

「こんなことわかったって、何にもならない」

息が荒い。

「こんなことを知るために……」

息が切れる。

「知らなければ……」

苦しいほどに。

「違う」

(もう、何も言わなくていいから)

「ここから……」

由宜の頭を胸に抱いた。

「時間がないのに……早く研究室に戻らないと……でも、わからないんだ」

うわ言のように、言葉は続く。

「もう、だめかもしれない」

その時も、涙を流したのは、弓子だった。

透子の死

ヘリが東京に着いた。夜になっていた。

笹原由宜は、家には帰らず、そのまま海老沢病院まで付き添った。院長室で、とりあえずのサンドイッチを摘みながら、一番にしたことは休場への連絡だった。

ずっと、少女のことが気に掛かっていた。何も手を打たない、という覚悟は持てなかった。

この窮地で、思い浮かぶのは、休場だった。『葉子が信頼した男』それがすべてだ。笹原の判断は、結局そこに納まつてしまう。

葉子が死んですぐ、休場は、彼女の手紙を持って訪ねて来た。そこには、ただ、彼に協力するように、書かれていた。葉子から何を依頼されたのか訊ねても、答えは率直だが、曖昧だった。

「書くこと」

「何を？」

「そこが自分でもまだわかってないところなんだ」

「書いてどうする？」

「そっちは、もつとわからない」

結局、休場には、社内新聞のようなものの担当を任せ、給与を支払っている。が、笹原は未だ彼の発行した印刷物を見たことがない。あれから六年。何をしているのか。何もしてないのか。

ただし、情報収集力においては、才能があるらしく、葉子という中心軸を失った笹原の仕事面でのブレをケアしてくれている。的確な相談相手だった。

笹原は、休場を、自分とは真反対の人間だと感じていた。フリーライターなどと名乗って、やくざな商売とうそぶいているが、善良さや誠実さがいつでもその言動に見え隠れする。とにかく、すべてを話した。

休場は、いろいろな可能性や疑問を口にすることなく、ただ、

「わかった、調べてみる」と答えた。携帯を切ると、机の上の電話が鳴った。内線である。友康の目覚めたことを告げられた。病室へ向かった。

「退院の許可はできない」

海老沢の声が廊下まで聞こえた。

「帰る」

中に入ると、友康はもう服を着替えていた。

「もう少し様子をみよう」

押し止める海老沢を無視して、友康はベッドから立ち上がった。

「自分のことは自分でわかる」

(どこの偏屈じじいのセリフだ)

笹原は二人の間に割って入った。

「君がどうしようも勝手だが、明彦君のことはどうする」

友康は、無表情に笹原を見返した。

(いつもこうだ)

「連れて行く」

「また、倒れたらどうする。そんな身体で、世話しきれれるのか？」

「別に世話というほどのことはしていない。大丈夫だ」

戸のカチリと閉まる音がした。気付かぬうちに、伽耶子が

そこに立っていた。彼女の視線は、まず、言い争う三人の男たちから外れて、飾り人形のようにぼつねんとベッド脇に座っている明彦に注がれた。そして、友康へと戻った。

「一週間、いえ、三日でもいい、うちへ帰ってきてくれませんか？」

伽耶子の声音は、懇願の響きを持っている。友康は、それにも、ゆっくり首を振る。

伽耶子は言い募った。

「姉さんの最期の言葉だったから、ずっと我慢していました。諦めていたんです。でも、こんなことになって、こんな時だから、お願いします」

伽耶子の視線は、友康をじっと捉える。恐らく彼に、権限はないのだ。伽耶子が望むなら仕方ない。

「わかりました」

友康は、静かに受け入れた。

その夜のうちに、友康と明彦は、白居家に移った。

「まあ、隣りのうちじゃ、病院内とたいして変わらないから大丈夫だよ」

海老沢が、妙に気を使ったような言葉を笹原にかける。黙り込んでいるのが気に掛かるのだろう。

「今日は、ここに泊まってく」

「ここって、この病院長室か？ だったら、部屋に泊まれよ」

と、口にして、海老沢は慌てて言い足す。

「俺の部屋にさ」

ここには、透子の死んだ笹原の部屋も、そのままにしてある。

「最期の言葉って、なんだったんだらう」

笹原のさつきから気になっていたことが、言葉に洩れた

「えっ！」

「葉子さんの……」

「あっ？ ああ」

海老沢は『最期の言葉』というところに過剰反応してしまった自分を誤魔化そうとして焦っていた。

「なんだったかなあ、普通に明彦君のことを友康に頼んで、

伽耶子ちゃんには、お前のところへ……っていうような。そんなこと言ってたよ」

笹原は肯いた。

（確かに二人にもそのように聞いている。

けれど、さっきの伽耶子の言い方は、なんなのだろう。葉

子は伽耶子と明彦の未来に何かを見たのだろうか。明彦に近付くな、というのが伽耶子への本当のメッセージだったので

はないのか)

明彦と伽耶子の繋がりが、兄妹以上のものであることは誰もが知っている。伽耶子はずっと明彦の側にいた。二人は一對の人形のように佇んでいた。

友康や笹原が、葉子と関係を持ったのは、随分と前のことで、彼女が自分の早すぎる死を予感していたとは、考えにくい。が、それでも今こうして、彼女の死から六年が過ぎてみると、葉子には、はなから大事な弟と妹を託す相手が必要だったのではないか、と思えてしまう。

笹原は、話題を元に戻した。

「いいさ、もうすぐ朝になる。このソファで寝るよ」

「朝っぱらから、あの婦長が来るぞ。やめといた方がいい」

「大丈夫だよ」

笹原は慣れたもので、戸棚から毛布を引き出すと、ソファに広げて潜り込む。

海老沢は、電気を消して院長室を出て行った。

『最期の言葉』それは、海老沢悠一にとって、禁句だった。

自室に戻る途中。病院と裏の家屋の間の棟に、由宜の部屋があった。十六年前、八月三日、透子はそこで死んだ。

その三日前、七月三十一日に隣家で白居嘉一郎が、死んでいる。突然の死。大騒動だった。四日が葬儀と決まる。だから、

ら、透子が息を引き取ったのは、嘉一郎の通夜の最中だった。

悠一は、死亡を確認し、死亡時刻を告げた。

透子の心臓が止まって、あれほど必死に透子の病と闘い続けた科学者としての由宜も消えた。娘の細胞の隅々まで、研究し尽くした男は、無力な父親に戻った。なんのことはない。透子の身体は、由宜の強い反対で、結局、不可思議な病を解明するために残されることもなく、茶毘にふされた。誰にその死を知らせることもせず、由宜・弓子・悠一の三人だけの葬儀だった。儀礼的なことは、何もしない。ただ、透子を骨にするだけの作業だった。

昼下がり。骨函と共に、部屋へ戻る。透子のベッドはそのままである。綺麗に整えられてはいたが、そのままであった。もぬけの殻の布団。手も足も下半身も失った透子が眠っている時も、人のいること感じられない平らな布団だった。

悠一は、ようやく

「ヨリ」

友の名を呼んだ。

「ヨリ」

返事はなかった。

慰めたかった。

透子のことを反芻した。今、由宜を慰められるのは、彼女

しかないと思った。

聡明な少女だった。弓子によく似た優しい目で、由宜を見つめていた。なんの泣き言も言わなかった。

彼女が言葉を失う前、どんなことを言っただろう。

最後に話したこと。

「透子ちゃんは」

今、本当に最期の言葉になってしまった。

「……つくって、いっしょに幸せに暮らしてって、言ってた」

海老沢の、聞こえなかった部分に、弓子が小首を傾げた。

すつと、由宜がベッドのサイドテーブルに歩み寄った。一番上の引き出しから、果物ナイフを取り出す。ベルトをはずし、ズボンを引き下げた。

悠一と弓子は、ぼんやりそれを見ていた。唐突なのに、澀みのない、ゆったりとした動きだった。由宜がナイフを自分の男性器に突き立てても、まだ二人は、動き出していなかった。スクリーンを通して見ているような現実感のなさだった。血飛沫と激痛にのたうつ由宜は、二人に悪夢の時間を与えた。

悠一は、四十半ばを過ぎた今でも、夢中過ぎて自分と自分の動作が遊離してしまう感覚を味わったのはあの時だけだと

思う。

必死で処置をした。死に物狂いで手術をした。

「僕の子は、透子だけだ」

由宜の呻き声。

「僕の子は、透子だけだ」

呻きは繰り返し続ける。

「僕の子は、透子だけだ」

悠一の頭の中をただただ巡る。

由宜を救いたかったのに。だから、口にした。透子の最期の言葉。

『妹をつくって、いっしょに幸せに暮らして』

由宜の返答は、突き立てたナイフ。

あらん限りの愛情を注がれた娘は、出来すぎた言葉を残した。父親は、それを拒否した。

(だとしても、結局、引き鉄を引いてしまったのは、俺なんだ)

この思いは拭いきれない。

手術が終わって、廊下のベンチに腰を下ろした。

「あの人は、普通の中に留まれないんです」

弓子が、悠一に語りかけた。彼女の目は、何を見つめているのだろうか。

「病気の娘を持った父親は、娘の介護やより良い時間を過ごさせる為に奔走するでしょう。でもあの人は病気をねじ伏せようとした。透子は心底、父親の幸せを願ったのに、あの人がだつてそんなことはわかっているのに、受け入れることが出来ない。諦めることが出来ない。」

（経過を家族に、弓子に報告せねばならない。自分は医者なんだ）

「許してあげて。あの人に、あなたを責める気はないの」

（赦す？ なぜ？ 俺がヨリを赦す？ ヨリは俺を赦すのか？）

「一命は、とりとめました。二、三日はこのまま集中治療室で感染に気をつけねば……」

言葉は続かなかつた。ばかばかしくも、嗚咽が零れた。

二十歳の葉子

海老沢悠一は、翌日、珍しく早起きだつた。院長室に泊まった笹原のことが気にかつた。病院はすでに朝の活動を開始している。一日の始まる活力に満ちた生活音や匂いに包まれている。

院長室を開けると、中から笑い声が聞こえた。婦長だつた。「おはようございます」

機嫌の良い笑顔で、海老沢を迎える。

「じゃあ、やってみて。絶対効果あるから」

笹原の言葉に、婦長はまた声をあげて笑つた。そのまま一礼して部屋を出て行く。

「朝からご機嫌だな」

海老沢のつぶやきを、笹原は聞かないふりである。

「何をやってみるんだい？」

「たいしたことじゃないよ」

婦長は、しつかりしたい人物だが、堅苦しい。朝から、ゲラゲラ笑うイメージではない。

「そうだよな、おまえってそういう奴なんだよな。時々忘れる」

「なんだ、それ？」

「俺や弓子さんの前とは、えらく違うってことだよ。他の人と話してるとこ見ると、騙されそうになる。まるでジキルとハイドだ」

「ひどい言われようだなあ。そんなに邪険にされるんじや、とりあえず帰るかな」

「そして、そのまま、一ヶ月も二ヶ月もなしのつぶてだろ」

「いや、そうはならないな。協力してもらうことがあるような気がする」

「なんだよ？」

「今は言わない」

「どうせ……」

「こつちだつて、どうせジキルとハイドだからな」

由宜は帰って行つた。

(すぐに連絡してこいよ)

海老沢は願つた。何か手を打ちたかつた。六年前、看護師の死んだ時、確かに由宜の言つたように何も起こらなかつた。でも、今度は無理だろう。跡形もなく、木も人も消えたのだ。どんな説明も言い分けも役にはたたない。そのうえ、子どもとはいえ目撃者までいる。笹原にこの事実を突きつけたかつた。いや、突きつけたくなかつた。

その日の午後、海老沢は、病院内で弓子に会つた。

「ヨリは、医院長室に泊まつたんですよ」

「まあ、そんなこと一言も言つてませんでした。すみません、ご迷惑をおかけしました」

「いや、別に迷惑ではないですよ。それで、今日は何のご用です？」

「お見舞いに」

「忙しいですね」

「そんな、先生や笹原から見たら、私なんて暇人です」

外見から見た弓子は、普通の五十代前半のおばさんだつた。

呑気で、人の良さそうな笑顔を見せる。

実際、専業主婦が暇人かどうかは別にして、彼女とはよく病院内で顔を合わせる。あちこちで、人の世話をしているらしい。

「なんですか、最近よく言う……ああ、そう、ボランティア、ボランティアのまねごとなんですよ」

弓子はそう言つて笑つた。

海老沢と別れて、弓子は、病院玄関へ向かう廊下を歩いてた。小春日和の中庭に面している。暖かそうな陽だまりだ。(でも、うそなのよね)

ガラスの向こうに一步踏み出せば、十二月の寒さがあるだけだ。年をとるとというのは、そういうことがわかるようになることかもしれない。

ベンチがひとつ置かれている。そこに座っていた少年と少女の姿を思い出した。

白居家の三人の子どもたちの中で、一番初めにみかけたのは、伽耶子だつた。

昼間、屋敷の長屋門の前を通ると、女の子が立っていた。そんなに頻繁に通るわけではないが、通るたび立つて

いる。不思議だった。

そう感じた人間が他にいないはずがない。病院の清掃のおばさんにそのことを話すと、聞きもしないのにいろいろと喋り出した。少女は、白居家の一番下の娘で、どこか精神に病があるとかで、学校にも行かず、日がな一日、兄が帰ってくるのを門で待っている。この町の常識であると言わんばかりの説明ぶりだった。

けれど、話に出てくる兄の方を見かけることはついぞなかった。

それが、透子の亡くなった後、由宜の入院中に、初めて見たのである。中庭のベンチに座っていた。

門の前でしか見たことのなかった少女。当然隣りに座っているのが、兄であろう。パジャマ姿で、細い、すっとした少年だった。人とは、違っていた。オーラがかけ離れている気がする。一對の人形のように、肩を寄せ合い、真っ直ぐ、病院の塀の向こう、白居家の森を見つめていた。

「どこが悪いんですか？」

海老沢に訊ねると

「別に。嘉一郎氏の葬儀で家が立て込んでたんで、預かってるようなもんですよ」という返事だった。

売店の同僚は、

「父親の亡くなったショックで、倒れちゃったんですって。

三人子どもがいて、女の子の方じゃなくて、跡継ぎの男の子が倒れちゃうんじゃない、ちよっと大丈夫なの？　って感じよねえ」

勝手な感想まで付け加える。

確かに線の細い少年だった。

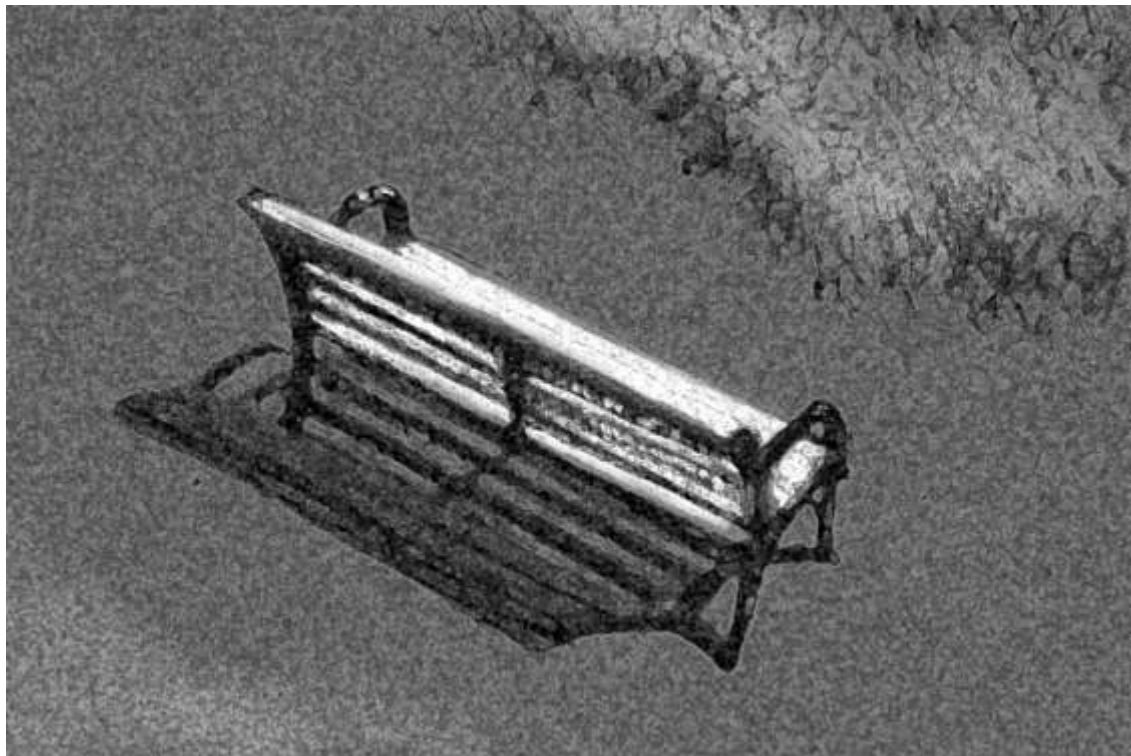
葉子との出会いは、もつと具体的だった。

売店の手伝いを終えて、夜、病室に戻ると、由宜のベッド脇に、葉子が座っていた。

事件から一週間。由宜の傷は若者らしい回復力をみせていたが、彼自身は、ほとんどしゃべることもなく、毎日ぼんやりしていた。

そんな由宜が、今、葉子から繰り出される矢継ぎ早の質問に、答えさせられていた。彼女が持ち込んだ山のような書類が由宜のベッドに広げられている。曲がりなりにも、嘉一郎のもとで、十年近く働いていたのだ。葉子の目の付け所は、間違っていない。

沈もうとする船から、皆が持ち出せるだけの利益を持って、逃げ出そうとしているこの時、何の欲するものも、欲する欲さえも持ち合わせていない由宜に助言を求めることが正解への一番の道かもしれない。嘉一郎自身は、人に裏切られても仕方のない人物だった。が、葉子は、この船、白居家を潰す



訳にはいかないのだ。

会話の中に何度か出てきたやりとりがある。

「無理だと思ふなあ。今の状態では……」

「ここは譲れないの。どうしても、あの屋敷は手放せない。弟たちには、あの森が必要なのに」

弓子は、昼間見た兄と妹を思い出した。透子と同一年の兄透子と遠く血の繋がった子どもたち。白居家の森に向けられた二人の真っ直ぐな視線。

葉子が帰った後、由宜は熱を出した。けれど、体の疲れは、人を眠りに導くのだろう。深夜、暗い病室の天井を見詰めている由宜を何度も見た。が、その夜は、浅い寢息が朝まで続いた。

葉子は毎日訪ねて来た。

嘉一郎の放漫経営は、生きている時から、破綻が来ていたと海老沢は言った。病院内でも、白居家の苦しい状況が取沙汰されていた。多大な資金援助を受けている。破産ということになったら、病院自体も危うい。

何度目か、経営を立て直す為に必要な土地売却の話が、由宜の口から出ると、葉子は珍しく声を荒げた。

「父は、復讐したかったのよ！」

「復讐？」

「祖父は、白居家の土地や屋敷を守る為に養子に迎えられた人だった。母やその一族にいつも見張られてた。父も、子ども頃からそうやって育てられて…… あなただって、父にそんな扱いを受けたでしょ。私があなたと結婚すれば、財産を分割せずに済むと言われたわ！」

この話は、弓子にとって初耳だったが、由宜は恐らく何度もそのことを、迫られていたのだろう。籍を入れることができなかつたのは、その為だったのか。

「そうやって、この土地と屋敷に縛られて、年をとって、やがて祖父母や親戚がこの世を去って…… ある日父は、もう何もかもが自分の自由になるってことに気付いたの」

「変だよ。それならもう復讐する相手だっていないじゃないか」

「それは違う」

「どう違うんだ」

「私たちがいる」

「馬鹿馬鹿しい。筋が通らない」

「あの家の木と弟たちを父は憎んでた」

「話が飛躍してる」

葉子は、こめかみを押さえた。

「ごめんなさい。今のは忘れて。こんなこと私の妄想だわ」

二十歳の葉子。

美というものの定義はどこにあるのだろうか。人は、純粋に顔立ちに美を感じるのだろうか？ 好みというものを飛び越えて、万人が葉子を美しいと感じると思うのだ。弟や妹の間離れしたオーラとは違う。葉子は、人を寄せ付けないのではなく、圧倒する。それは、活方や意志の強さでもあろうが、理解力なのかもしれない。

由宜のベッドに書類を持ち込んで、仕事に巻き込んでいく。葉子の窮状もある。でも、それだけなのか？ なぜ、ここに由宜が入院しているのか、知らないはずがない。

娘を亡くして、男根にナイフを突き立てた、そんな馬鹿馬鹿しい男のもとへ、なぜ通って来る。一日目から、一度も由宜に体のことを訊ねない。でも、どんなに話が中途半端になっても一時間以上の長居をしない。

今はまだ、ただの女子大生である葉子。けれど、その良識と嗅覚は、由宜と葉子が同じ種類の人間であることを感じさせる。高い視野、深い理解力。出会った頃、急速に由宜が成長したように、葉子も伸びていくに違いない。二人はこれ以上にならないパートナーだ。

弓子は、洗面所で鏡に映った自分を見た。二十歳の葉子とは、かけ離れた、三十も後半の平凡で疲れた女だった。

退院が決まると、葉子は住む所を用意してくれた。新しい生活の費用を渡され、病院の清算も済んでいた。

「潰れそうな会社だけど、笹原さんが助けてくれれば、立て直せると思うから、先行投資」

と葉子は、笑った。

退院の日。ハイヤーが到着した。弓子は、由宜を呼びに病室へ向かった。ドアノブに手をかけると、中から葉子の声が漏れ聞こえた。

「娘さんのこと、お悔やみ申し上げます」

初めて、透子の上に触れた。

儀礼的なことを一切、折って生きて来た自分たちにとって、それは不思議な言葉だった。最も儀礼的に何を考える余地も与えず、それでいて葉子の口から零れると、どんな慰めの言葉より誠実だった。

そして、彼女はすっと力を抜いて、ベッドの端に腰掛けた。

「あなたから見たら、つまらないことだと思うけど、私にもつらいことがあるの」

部屋に入るのが躊躇われた。

「会社を救うように、私のことも助けて欲しい」

ドアの隙間から二人の姿が見える。

「私を抱いてくれる？」

由宜が、吹き出した。それは、思わずの、自然な笑顔だった。

た。

「いや…… 無理じゃないかなあ」

それは、彼の今の機能のことを言ったのだろう。葉子も微笑んだ。

「無理だったら、それは、それで仕方ないけど」

彼女は跪いて、由宜の股間に口づけた。由宜の笑顔のように、自然な動作だった。

新しい部屋で、初めての夜、由宜が眠りにつくのを見計らって、透子の位牌をバッグに詰めた。

海老沢病院の透子の死んだ部屋からは、何一つ持ち出さなかった。部屋におくものは、みな新しく買い揃えた。自分も含めて、透子を思い出させるものを、由宜の視野に入れたくなかった。由宜には生まれ変わって欲しかった。

部屋を出た。東京にしては珍しく、星のよく見える夜だった。

小さかった由宜。大人になって訪ねて来た由宜。娘を守りたくてどうしようもなかった由宜。透子が死んで……。由宜と共に倒れてしまうしかないと思った。自分には支えきれない。透子の最期の言葉を、唯一の友である海老沢の差し伸べた手を、あんな形に振り切ってしまった。由宜を救う道は、

もうないと思つた。

葉子が現れた。

葉子は、由宜を導いて行く。

大きく傾いた心。心のままに行動してしまふ力。

律することの出来る存在が現れた。

道路のアスファルトは、湿っていた。いつ雨が降つたのだろう。気付かなかつた。

(あの時、葉子さんは気付いてた。ドアの陰の私に聞かせたのだ)

深呼吸した。今見た由宜の寝顔が思い浮かぶ。こういう時に込み上げる感情は、昔からずっと変わらない。愛しかつた。

誰にも知らせず始めた地方のアパートでの一人暮らし。突然、葉子が訪ねて来たのは一ヶ月後のことだつた。

部屋に座ると、周囲を一瞥することもなく、近況を尋ねることもなく、葉子は話を切り出した。

「私には笹原が必要だけど、笹原にはあなたが必要なの」

(『笹原』と呼んだ。二人の関係は、一歩進んだのだ……)

返事することが出来なかつた。

「笹原と私のことが不愉快？」

首を振つた。

「ありがとう。あなたは、私たちの関係を許してくれるって思つた」

(だから、あの時、私に聞かせた?)

葉子は世間の常識の外にいる。

由宜を葉子に奪われた、と感じることはなかつた。由宜を救つてくれた。感謝している。

「父が私たちの結婚を望んでいたことを気にしている?」
もう一度、首を振つた。

「私は笹原と結婚しない。誰とも結婚しない。戻つて。籍を入れて、笹原の妻になつて。彼に家を持たせてあげて。彼には玄関の花が必要なの」

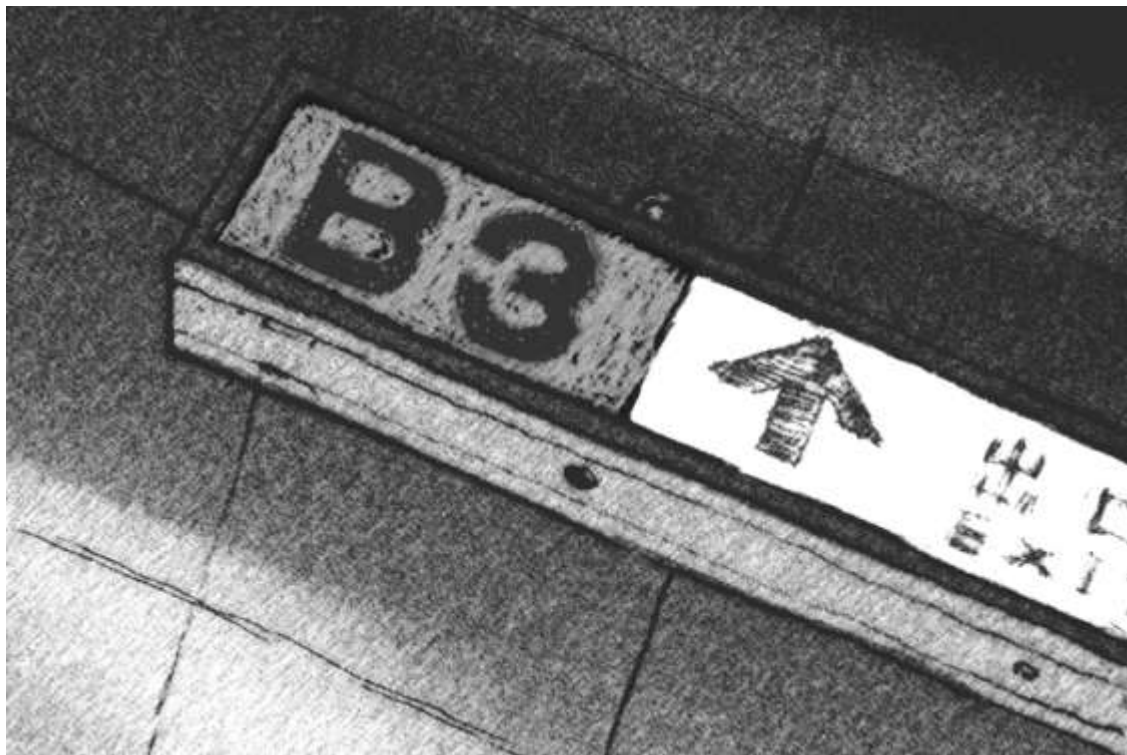
それは、奇妙な説得力を持った言葉だつた。

透子の為に、その身を削つていた由宜。彼が緊張を解く瞬間を作りたかつた。だから、毎日玄関に花を飾つた。

もしかしたら、帰つて来なかつた大半の日々も、由宜はそこに待つ花と女のいることに思い至つていたのかもしれない。日々の緊張と目まぐるしい変化に翻弄されながら、たとえ帰れなくても、待つている存在を感じていたのだとしたら。

意外だつた。由宜の大きさに比べて、自分を平凡な取るに足らない存在だと思つていた。多少なりとも支えになつていたのなら、支えであり続けたかつた。

あれから、十六年が過ぎてている。弓子は、同じ場所に立ち



ながら、時の変化を思う。そこにあるベンチは、あの時のベンチなのだろうか？

葉子がいけないことが一番不思議だった。葉子を失いながらも、

日々が穏やかに流れていることが不思議だった。由宜が暴走して、他人も自分自身も傷つけることがなければ、それだけで充分だった。

砂漠の坊や

海老沢悠一は、地下鉄を降りた。

確かになしの礫ではなかった。三日後には、笹原から連絡があった。連絡どころか、とにかく急いで調べると矢の催促だった。結果は電話で報告したが、顔を見て話したかった。

改札を出て、しばらく続く地下道は、平日の昼間にも関わらず、人通りが絶えることがなかった。B-3と表示された階段を上る。前にも後ろにも、いかにも勤め人風の男女が三々五々歩いている。大通りの歩道を左に折れる。今地下から上ってきた全員が、そちらへと向かった。次の信号に、また全員が立ち止まる。歩行者用の信号が、青い歩く人型に変わると、そろって歩き出し、そのまま目の前の巨大なビルに

吸い込まれていく。

(なんだ、みんな目的地はいっしょか)

ビルの前には、警備服の男が左右に立っている。これだけの人通りがあつたら、意味なさそうだが、

(人の職業的眼力は、捨てたもんじやない)

と笹原は、言っていた。

正面には、いかにも美しげな受付嬢三名がいた。英語・フランス語・中国語はまだしも、中東の人間らしい数名に、笑顔で説明しているのには驚いた。前回来た時にも、感じてはいたが、ここは人種のるつぼになっている。

海老沢は、笹原由宜を何と叫び出していいのかわからなかった。戸惑った。

(社長というのだろうか?)

八年程前、初めてここサクヤグループの新社屋を訪れた時、もちろん外見は今のままで、こんな風に活気に溢れて機能してはいなかった。大きな器は、山中の寺のような静寂に満ちていた。受付はじつと前方を見つめたままの人形のようにだっただけ、ほとんど人通りがない玄関に立つ警備員は、置物としか見えなかった。

お互い近くに住んでいるので、おおよその用事は、済んでしまう。こんな風に笹原の職場を訪ねる機会は少ない。用事で近くに出てきていたこともあつて、寄つたのだが……。

「失礼ですが、海老沢様でしょうか？」

右端の受付嬢に突然声をかけられた。

「はい」

「社長室まで、ご案内致します」

手回しがいいのは、いつものことだ。三人の中で、一番海老沢の好みの子が、声をかけてきたのさえ、笹原の手回しの良さに思える。

最上階まで案内された。この前がいつだか覚えていない、二、三年前か？ その時は、まだここを使つてはいなかった。葉子の為の部屋だと言っていた。いつからここを使うようになったのだろうか。これだけ、人の出入りが激しくなつたのは、手狭になつたのは間違いないが……

(もういいかげん、吹っ切つてもいいじゃないか)

エレベーターホールから部屋へ入る。相変わらずの絶景だ。最上階をワンフロアに使つた天空の居室である。

「そんなことに付き合つてられるか！」

笹原の怒号が飛んで来た。

(珍しい！ 厭味なほどに、外面のいい男が、誰を怒鳴っているのやら)

「もう一度話しますからね、よく聞いて下さい」

「説明は、わかつてる！ そういうことじゃないだろう。レ

アメタル商人のバカ野郎どもに、なんでそんな金を払う必要があるんだ」

怒鳴られている方の男は、笹原の怒声どこ吹く風で、地図らしきものを広げて説明を始める。

その横顔を見ていた海老沢は、突然思い出した。

「砂漠のボーヤ！」

男がその声に顔を上げる。

「先生、海老沢先生、お久しぶりです！」

あつという間に、大股で近付き、両手で抱きついてくる。

その迫力に、海老沢はたじたじだった。

「先生、背、縮みましたか？」

男の天衣無縫な物言いに、しみじみ相手の顔を眺めた。チヨビ髭が生えている。

「なんだ、その髭！」

「なんだ、はないでしょう。男のたしなみですよ」

「相変わらず砂漠暮らしなのか？」

「はい、相変わらずです」

男は真っ黒に焼けた顔に白い歯という、さわやかすぎる笑顔を見せる。童顔なので、坊やと呼ばれていた。もう三十は、とうに過ぎているだろうに、そんな所は変わらない。

「明日また来い。今日は悠一と大事な話があるんだ」

「明日に伸ばせば、損失が増えるだけです。今、決断しても

らう為に、わざわざ僕自身が説明に来たんです」

「開発の方を急がせる。今夜、研究所に寄ると伝えておけ！」

「それは、別の話です。急がせたって、明日どうにかなるってもんじゃないでしょう！」

「わかった、もういい。そっちは任せた。どうせ反対したって聞きやしないんだらう」

笹原は、男にもう帰れというように手を振った。

「先生、いい所に来てくれました。笹原さんの気が変わらないうちに行きます。じゃあ」

男はあつという間に出て行った。

「慌しい奴だなあ」

海老沢の目は、飛び出していく男を見送る。『砂漠の坊や』 会うのは何年ぶりだろう。いつ会ってもほっとする人懐っこさを持っている。

「結果に間違いはないのか？」

笹原が訊ねた。

「森亜子は、白居明彦と親子関係であるという判定だった」

「そうか」

「でも……」

「でも？」

「なんか変らしいんだ」

「何が？」

「さあ？」

海老沢は首をすくめた。

明彦が木と女を消し去った村へ休場を送った。休場からの連絡は、少しずつ事の概要を明らかにした。

樋山友康を樹医として呼んだのは、森佐菜子であった。かつての明彦の同僚であり、退社後、実家に帰ってすぐ私生児を生んでいる。

少女を見た時、太郎に似ていると感じた。

笹原は、海老沢に、休場から送られてきた亜子の髪の毛で明彦とのDNA鑑定を依頼した。結果は電話で知らせたが、海老沢は一応鑑定結果の書かれた用紙を笹原の前に置いた。

「ちようど、こっちに出てくる用があったし、話が込み入った感じだったんで」

「だから、何が？」

「明彦君のDNAは、おかしいらしい」

「おかしいって？ どうおかしいんだ」

「よくわからない。俺がじゃないぞ。調べた奴がそう言うてるんだ。もっと詳しくいろいろ調べたいって」

「結構だ」

「なんで！」

「おかしいに決まってるだろう、まともな奴があんなことしでかすかよ！」

笹原の言葉は、あの日の光景を、想起させた。

「なるほど」

海老沢は、妙に納得した。

「それで、亜子ちゃんという子はどうしてるんだ。あの消えた女が母親なんだって？ そりゃ大変な騒ぎになってるだろう」

「それがそうでもない」

笹原は考え込んだ様子で返事をした。

「なんで？」

「その子は、母親は男と村を出て行った、と言ったそうさ。そして、それきり一言もしゃべらない」

海老沢は頭を掻いた。

「うーん、わからない。なんでそんな都合のいい展開になるんだ？」

「その上、木は友康を迎えに来たヘリコプターが持ち去ったことになってるらしい」

「有り得ない程の都合だ」

「人間、理解を超えると勝手な解釈をするものらしい」

（確かにあのタイミングで消えたことを考えると、木の大き

さを考慮しなければ、そういうことになる)

「多少、休場が情報操作してくれたのかもしれないが……」

海老沢は肩を落として、椅子に座り込んだ。正直、ほっとした。

「この三日間の心配の種が勝手に消えたって訳だ。胃に穴があくかと思ったよ。あの村に、ワイドショーのレポーターが殺到するところや、友康や明彦君の素性がばれて、となりの屋敷がカメラや取材でいっぱいになる夢を見たよ。お前は平気でも、俺は物凄く気の小さい男なんだ。頭ん中じゃ、中世の魔女狩りみたいなストーリーまで出来上がってた」

「ご立派な想像力だな」

笹原はあくまでポーカーフェイスを崩さない。

(うそつき野郎!)

海老沢はわかっていた。

(透子ちゃんの名が思わず、口について出たのはなぜだ)

秘書がコーヒーを入れてくれた。ソファに深く座り直して、香りを楽しんだ。

「それにしても、親子とはな。これからどうするんだ?」

笹原の返事はなかった。

「そう言えば、おまえ、サクヤグループって、どうしてサクヤグループって言うんだ?」

「何だよ、突然」

(これには返事ありか)

「いや、今、聞かれたんだ。それもノーベル賞受賞者にどうぞ」

「ノーベル賞受賞者?」

「ユージン・ムーアって知ってるか?」

「当たり前だろ、去年ノーベル医学賞を取った」

「まあ、世間一般では当たり前とはいかないが、お前なら知ってると思ったよ。」

今日の用事っていうのは、我が母校で、来年度の入学式に彼の講演を依頼したんだ。医学部七十周年行事の一環らしい。出来れば、客員教授になって欲しいというお願いも兼ねての、来日打ち合わせ会みたいなもんがあつてさ」

「回りくどいなあ、だから何なんだよ」

「突然俺に近付いてきて、海老沢病院は、サクヤグループと関係があるそうですが、サクヤというのは、どういう意味ですか? って聞かれたんだ」

「おまえの英語あてにならないからなあ、聞き間違えたんじゃないのか?」

「日本語だったから、間違えようがない」

「そりゃ、意外だな」

「笹原由宜という、おまえの名も知っていた」

「有り得ない。十六年も前のことを」

海老沢には、触れ難い部分だった。研究に明け暮れた十年間、由宜の知り合いは全世界に広がっていた。それほど、彼の研究は優れていたし、非常に有効な薬の開発、人ゲノムの解明にも、手腕を発揮した。ただ、彼の場合、研究の成果をまとめることはなかった。研究の目的は、透子を救うことだったのだから。

公表されることのない研究成果ではあったが、科学者たちの手元には、若い日本の研究者からの問い合わせの書簡が残っている。その発想の斬新さは、彼らに衝撃を与えるものだった。

「サクヤというネーミングがユージン氏にはひっかかるらしい。それと、サクヤが笹原由宜と結びついていることが」

「ふうん」

笹原の返事は力のこもらないものだった。

「考えてみたら俺だって知らないよ。葉子さんが付けたんだ」

「もともとは白居株式会社だったろう、なんでサクヤなんだ」

「さあ」

笹原は惚けた。

海老沢は、これ以上サクヤについて、笹原が説明する気のないことを感じた。

（おおよそ、思っていることの一割も説明しない男だな。出さなくていい犠牲者を出して、遅かったと嘆く名探偵みたいなもんだ。もっと、そこに辿り着くまでの思考過程をその都度説明しろ、と言いたくなる）

「明日は十一時だったよな」

話す気のないこと聞いても無駄だとばかりに、海老沢は話題を変えた。

「えっ」

「葉子さんの七回忌だよ」

「ああ」

「おまえ、行かない気だったのか？」

「まさか」

（昔とは違う。お互い、もうご立派な社会の一員になっている）

海老沢は、そう念押ししたい言葉を飲み込んだ。

翌日、白居葉子の七回忌。

社会の成員と成りえていない友康と明彦は、白居家にいてもかかわらず、姿を見せなかった。白居家にいるとはいっても、部屋に引籠もったきりである。

白居忠保に比べ、息子の嘉一郎には洒脱な所がなかった。

嘉一郎に比べ、葉子は、人との付き合いに縛られる所がなか

った。そして、伽耶子はそれ以上に誰とも親しくなることのない人間だった。代を追うごとに、白居家として、人を集めることも少なくなり、親戚もよりつかなくなっている。

七回忌に集まったのは、三十名程だった。白居家の縁戚であることにしがついていてる老人たちと、本当に葉子に心を寄せていた人間たち。その中には、『砂漠の坊や』こと、塚田瑛佑もいた。

「よく恥ずかしげもなく、顔を出せたもんだ」

「あんなに、葉子に世話になったあげくに」

海老沢は、瑛佑を横目で見ながら、親戚の老人たちのささやく声を聞いていた。噂の当人には、そんな声など耳に入っていない。ただ熱心に葉子の遺影を見詰めている。

（こいつは、何を言われようが気にする奴じゃない。悪口を言うだけ無駄というもんだ）

瑛佑は、ただただ葉子に心酔していた。何年か白居家に居候していたこともあつたはずだ。

読経が終わった。笹原といっしょに、塔婆を墓へ運びながら、海老沢は、瑛佑への陰口のことを話した。笹原の返事は冷淡なもんだった。

「言われて当たり前だ。危うくサクヤグループを潰されるとこだったんだからな」

「あいつの仕出かした失敗って、そんなにどでかかったのか？ 葉子さんの亡くなった直後だったよな」

むしろ、そんな危機に追い込まれたお陰で、笹原は葉子の死に囚われ続けている訳にはいかなかったのだと、弓子から聞いたことがある。

「数十億の損失だったって？」

海老沢が話しを向けると、笹原は厭味なほど、あからさまに、呆れた顔をした。

「二桁違う」

「千億ってか？ 国家予算だ。そりや、親戚に何言われたってしょうがないな」

「大げさな。でも、その後、あいつがどれほどの仕事をしたか、こんなところにポケナンと住んでる奴らにはわからないからな」

思わず出た言葉だったのだろう。笹原は、瑛佑を庇う発言をしたことに、ばつの悪い顔を見せた。

法事の後、海老沢は会席に向かう人の流れから、瑛佑がそと離れていくのを、見かけた。

「塚田瑛佑君」

声をかけると、驚いたように目をしばたかかせて、振り返った。そして、笑顔を見せる。

「先生脅かさないで下さい。僕、このまま成田に向かうんで、そつと失礼しようと思つて」

「笹原には、いいのか」

「もちろん、挨拶してありますよ。」

「そうだ、この前はありがとうございました」

「何かお礼を言われるようなことしたかな？」

「うまいタイミングで現れて頂いて」

「そうか？」

「お陰で、あのあと、怒りまくった笹原さんが、研究所の奴らんとこ乗り込んで、新素材でセンサー部分を作れることになつたから」

「よくわからないが……」

「僕、笹原さんを怒らせに行つたんだけど、話が長くなると、逆に説得されちゃうから、怒らせた所で逃げ出すのがコツなんですよ」

「おまえ、なんかすごい奴になつてるな」

「すごいのは、笹原さんですよ。レアメタルが高値になつたつて、こっちは言いなりになるしかなかった。新素材なんて、みんな半信半疑でしたからね。現実のことにしてくれるのは、いつだって笹原さんしかいない」

「だから怒らせるのか？」

「まあ……」

「決まり悪そうな笑みをみせる。」

「笹原もお前にあつちやかたなしだな」

「こんなこと笹原さんにバラさないで下さいよ。もうこの手が使えなくなる」

「わかつたよ」

「じゃあ、僕このまま帰ります」

「砂漠へか？」

「はい、僕の第二の故郷ですから」

もう一度、ニツと笑うと、瑛佑は、大股に歩き去つて行つた。頼もしい後姿だった。

確か明彦とは二歳しか違わないはずだ。高卒で入社。配送係にいた彼を、葉子がどこをどう気に入つたのか、自宅にまで居候させ、二部の大学に通わせた。

拾つて来た時は、ひよっこだった。何の雛なのかわからなほど、震えながらピヨピヨ鳴いていた。こんな大鷲のヒナとは、思いもよらなかつた。

五 差路

内海たすくは、二時頃、成徳寺を訪れた。三度目の墓参りだった。初めは、叔母の死を知らされた時。すでに、一年が過ぎていたのだが、闘病中の祖母を介護する祖父に代わって、

ここを訪れた。二回目は、祖母が亡くなった時、その報告に。そして、今回は、祖父他界の報告である。ずっと気に掛かっていた。が、仕事に追われる毎日だった。

(命日だから)

と、やっと重い腰を上げた。

こんなことでは、もう墓参りに来ることもないかもしれない。一言、住職に挨拶して行こうと、母屋を訪ねたが、生憎住職は留守だった。

「そうですか」

とりあえず、包んできたお布施を手渡した。丁度そこに住職が帰って来た。

「まあ、お茶でも」

話好きの住職に勧められて、座敷に上がった。

「午前中、仏様のご主人も墓参りにいらしてましたよ」

「はあ」

叔母の亭主の豆腐屋とは、六年前会ったのが初めてで、このまま二度と会うこともないかもしれない。

「午前中に一つ法事が入っていたもんで、そのお食事に呼ばれていたんですよ。失礼しました」

「法事？」

六年前にもこんな会話をしたような気がした。これから葬儀がある……

「森のうちですか？」

「はい。白居葉子さんの七回忌です。白居さんをご存知でしたか？ それにしても、葉子さんは、弟や妹が心配なままですかなあ」

終わりの一言は、住職が、自分に問う、独り言のようだった。

「いえ、葉子さんという方と面識はありませんが、一度だけ、弟さんにお会いしたことがあります」

あのことを、出会いと表現するものは、疑問だが。

庭一面の桜の花弁、古木に刺し抜かれた細い体、血……そのすべてが一瞬の幻想であったとは。何がそんなものを見せたのか。前日に彼の姉葉子がそこで亡くなったと聞いた。

その時も、自分の叔母と同じ日が命日にあたると思った。

「明彦さんをご存知ですか？ 私もあれ以来、六年間、一度もお会いしたことがなかったのに、三、四日前お見かけしましたよ。だから、今日の七回忌にはおみえになると思っていたんですが」

(確かお手伝いさんらしき女性は、彼を病院に入れると言っていた。ずっと入院していたのだろうか？)

「弟さんは、病院に入っていたのですか？」

「さあ、どちらにしても、頭の病では、なかなか。でも、伽耶子さんは、随分大人になられたし、従兄弟の笹原さんがバ

ツクについておられるから、白居家は安泰でしょう」

ひとしきり住職の世間話に相槌を打って、寺を後にした。

初めて訪れた時が、海老沢病院横のバス停から、白居家の門の前を通ってくる道筋だったので、ここへの往復はいつもそこになる。

祖父母が亡くなった途端、叔母は、遠い過去の人になってしまった気がする。

長くいだらだらした坂道。低い塀が続く。塀の上に白居家の森が被さっている。中ほどの門の所で叔母の連れ合いを見かけた。話しているもう一人の若者も知った顔だった。

「ご無沙汰しています」

叔母の亭主であった男に声をかけた。今日は豆腐の箱を積んだ自転車は、引いていない。

とつさに、誰だろう？ という表情になった。自分は職業的に、人の顔を憶えるのは得意だが、彼と会ったのは六年前の一度きり、それもわずかな時間だけのことである。

「内海たすくです。今日は叔母の墓参りに行って来ました。」

祖父が亡くなったことを報告しようと思つて」

「そうですね、お亡くなりには」

豆腐屋にも、彼なりの感慨があるのだろう。沈み込むようにそう言うと、次の言葉が出て来なかった。

「内海警視でありますか。自分は、今度綾瀬署に配属になり

ました高野洋二です」

立ち話をしていた若者が名乗りを上げた。

「君は今、私用だろう。私もそうだ。そんな堅苦しく名乗られても」

豆腐屋が、それを潮に

「では、これで。よろしくお伝え下さい」

頭を下げて、そそくさと門の中へ消えて行つた。

（誰によろしく伝えるんだ。もう当事者は誰も残ってないじゃないか）

相変わらずの貧相な後姿を見送りながら、やはり憤らずにはいられない。

帰りがけ、内海は、その若者とバス停までのみちのりを歩いた。

「君はあの白居家に用があつたのかね」

若者、高野洋二に問うと、早口に、白居家との関係を語り始めた。

洋二の兄が、白居家で面倒をみてもらっているという。六年前に洋二の姉美津子が急死した折、白居伽耶子に、美津子が、彼女の兄白居明彦と付き合っていたと告げられた。それは唐突な話であり、姉が亡くなってそれきりになっているものと思つていた。しかし、その後も白居家からは、金銭その

他で、様々な援助がなされていたらしい。知能に問題のある三十過ぎの兄を抱えて、母は苦勞していた。手紙だけの付き合いではあったが、伽耶子を非常に信頼し、三年後、姉美津子の後を追うように亡くなる寸前には、兄のことを伽耶子に託した。そして、兄は今、白居家で暮らしている。洋二は、兄とお互いだ一人の肉親になってしまった訳で、時折会いに来るとのことだった。

「今日は姉の命日で、父母とともに、墓は新潟なのですが。七回忌なもんで、新しい署に配属された報告がてら、朝から墓参りに行ってきたんです。で、兄の好物の笹団子をみやげに寄ってきたところですよ」

「それは、偶然だ。私も今日は墓参りでね」

「そうおしゃってましたね」

「叔母の命日なんだ。この先に墓がある」

内海は、自分の言葉にふっと躓いた。

もう一人、今日が命日で七回忌の人物がいる。さっき話に出た白居葉子だ。弟？ あの前の高い、現実離れた青年は、葉子という姉を亡くし、向こうの世界へ踏み込んでしまったのではなかったのか？ 同じ日に恋人を亡くしていた？

(同じ日？ 偶然すぎないか？)

「お姉さんは、どこで亡くなったんだね」

「海老沢病院という、この森の向こうにある病院で。看護師

をしていたので…… 勤務中に心筋梗塞で」

同じ日、隣接する二つの場所で……関係のある二人の女性の死。

偶然のほずがない。

内海は、新しい部下高野洋二の運んで来た事件の臭いに、動揺を禁じ得なかった。

その午後、出社してすぐ、ユージン・ムーア氏の突然の来訪を告げられた時、笹原由宜は、一抹の不安を覚えた。

ドアから現れた人物は、いかにもユダヤ系の白人といった風貌だった。細く萎びた彫りの深い顔。白髪と、色の薄い目が、理性の象徴のように見える。

海老沢悠一という共通の知人がいるということで、この不躰な訪問を、許して欲しいと流暢な日本語で話した。かれこれ五十年以上、半世紀も前になるが、初恋の人は、日系アメリカ人の少女であった。自分の日本語は、そのお陰だと説明した。

人と会うことは、今の笹原にとって仕事そのもののようなものだった。世界のどんな人物と会って話すことになっても、臆する気持ちはないが、このノーベル賞学者は、仕事ではない、プライベートな部分に触れてきそうで、警戒心が働いた。

「その少女は、コノカという娘を産みました」

ユージン・ムーアは、静かに語り始めた。

(この初恋物語は、何の入り口なんだ?)

笹原の頭は、昨日海老沢の話していたことを目まぐるしく反芻していた。

「コノカには、サクヤという双子がおりました」

(サクヤ、海老沢はユージンがこのネーミングにこだわっていると言った)

「日本人で、サクヤという名は、一般的なものですか?」

「そんなに多くはないと思いますが、名前なんて流行り廃りのあるもんですからねえ」

ユージンは、書類入れから、紙の束を取り出した。一番上の見出しの文字は、笹原自身のものだった。

「これは、我々、細胞、特に遺伝子を研究するものにとつては、ずいぶんと話題になった書簡です。当時、ここからの発想をもとにしたのでは? と思われる研究発表がいくつもありました。若くしてこれほどの高みに到達しながら、それきりだった」

ユージンは、探る様に笹原を見た。

「今回来日して、海老沢氏に会わなければ、この書簡の送り主笹原由宜氏とサクヤグループのトップである笹原由宜氏が同一人物であるとは思いませんでした。研究者から、事

業家へ転身した訳ですか?」

「別にもともと、研究者だったわけではありません」

笹原はプライベートな部分に踏み込まれた途端、快活に会話を事業家の仮面をつけることが、困難になる。なぜなら、事業家として相手に見せつけるポジティブなオーラは偽物だからだ。

「しかし、数々の実験を成功なさっている」

「研究者だったことなど、一度もない」

どうしても、つつけんどんな返事になる。

「そうですね、あなたは、世界中の科学者にすべての研究結果をさらけ出して、助言を求めただけだった。けれど、救いの手は差し伸べられなかった。おそらく、あなた以上の成果を持つものは現われなかった」

ユージンは、言葉を切った。

「どのくらいになるのですか?」

笹原は、顔を上げて、真正面からユージンを見た。

(透子が死んで?)

「実業家に転身なさってから?」

「十六年ほど、です」

「それでこれほどのお仕事をなさっているとは。どの分野において、秀でた才能というのは、開花するものですね」
内線が入った。先ほどから待たせたままの来客がいる。

「すみません。お忙しい所に割り込んで。私は一度アメリカに戻りますが、また来ます。今度はスケジュールを調整して、ゆつくり会つて下さい」

ユージンは、書類を鞆に戻した。立ち上がって、ドアの方へと移動しながら、

「私の母は、航空基地でドクターをしていました。彼女は、何かを恐れていた。二十八年前のある日、その恐れたものがやって来た。彼女は、消されてしまった」

「どんなふう」

「何ですか？」

「どんなふうに消えたのですか」

「木端微塵というのでしょうか。私はそれを見たけれど、誰がそんなことを信じるでしょう？」

ユージンの言葉が、亜子の顔を思い起こさせる。

（誰がそんなことを信じるでしょう？）

無表情に虚を見詰めていた。

（誰がそんなことを信じるでしょう）

彼女もそうあきらめたのだろうか。

「あとかたもなく、何も残らなかった」

そう言うと、ユージン・ムーアは、笹原に向かって静かに微笑んだ。

「長い人生で、ほんの数人ではありますが、心を許した人に

この話をしました。けれど、消されてしまった、そう言って、言葉通りに受け取られたのは、初めてです。あなたの質問は不思議ですね。どんなふう消えたのですか？　と言いました。人間というのは、消えるものなんでしょうか？　私の方が見たい」

笹原は、何も答えることが出来なかった。

「それは、サクヤの作業なんですか？」

笹原は、立ち尽くしたまま、取り繕うことも、ドアまで見送ることさえ出来なかった。

「では、また」

その反応をゆつくり見詰めながら、ユージン・ムーアは去って行った。

海老沢に聞かれたとき

「俺だって知らないよ。葉子さんが付けたんだ」と答えた。

今、ユージン・ムーアの質問にも

「名前なんて流行り廃りのあるもんですからねえ」と返答した。

『サクヤ』グループ。なんでそんな名前を付けた。なんでそんな、少女趣味なまねをしたんだ。

災厄を招く。

予感がした。

「サクヤ・グループに改名する？　なんなんだい、そのサク

やっていっのは？」

十年以上前、笹原自身もそう訊ねた。

「私は明彦の本当の名だと思ってる」

葉子はそう言った。

「明彦は、父の付けた名。でも、母は生まれて来た赤ん坊をサクヤって呼んでた。死ぬまでずっと」

この話は、葉子の弟への執着を表すエピソードのようで、誰に話したこともなかった。

二十八年前。明彦はまだ生まれていなかった。いや、明彦が生まれた時なのかもしれない。

七回忌の会食の後、伽耶子は、奥の間で、笹原の妻弓子と向き合っていた。

「亜子ちゃんという兄さんの子を引き取る？」

「はい、笹原がそう言って」

伽耶子の見た明彦の心には、亜子の姿も、森佐菜子の姿もなかった。すでに、明彦の目は、認識して記憶に止める役を担っていないのだ。

「太郎の姉？」

「いえ、あの、いとこにあたる」

弓子は小さな声で訂正した。太郎は葉子の私生児であり、亜子は、明彦のまだ認知していない子である。弓子は、そこ

にこだわるのである。

太郎の父については、誰も何も言わない。タズなど「葉子さんの子です。父親はいりません」の一点張りである。

「笹原さんが育てるといふこと？」

「はい」

弓子が控えめな返事をする。伽耶子に見える弓子の心にあるのは、五十歳を過ぎて、孫のような子どもの面倒をみることに対する不安である。

(ちゃんと、育ててあげることができるのかしら?)

という健全な不安である。

弓子は、普通のことを普通に考える。その安心感を葉子は好んでいた。弓子も葉子に多大な信頼を寄せていた。

けれど、伽耶子と弓子の関係は、微妙である。

大方の人々のように、弓子は伽耶子に異質を感じている。

伽耶子は、知っている。兄と自分だけが、この世界の二人なのである。人が自分たちを排除するのは正しい。人はみな繋がっている。細胞は細胞からしか生まれない。生命はどこかで、自分たちが一つであることを知っている。

葉子は、未成熟な二人、明彦と伽耶子に手を差し伸べ、人として生きる術を教えてくれた。果たして、

(太郎と亜子は、どちらの側に立っているのだろうか。同じ親の元に生まれても、姉と自分たち二人は違う所に立っていた。

同じ兄の血をひくもの。それは、兄の欠片なのだろうか？

庭の方が、騒がしかった。

二人は立ち上がって、縁側に出た。友康が太郎を抱きかかえて、走って行く。その後ろにタズがいる。

「タズさん」

呼び止める伽耶子に

「この前と同じで…… 太郎ちゃんが…… 海老沢病院に連れて、先生も、今、そこまで出て来てくれると……」

最後の方は、もういい加減に発せられていて、何を言っているのかよく聞き取れなかった。タズの足は、太郎の後を追って行く。

「弓子さん、行ってみてくれますか？」

「わかりました」

弓子は、縁側から降りて、つかかけを履いて出て行く。

伽耶子は、裸足のまま庭に下り、今、友康の走り出て来た方向に向った。太郎に起きたことを、理解せねばならない。

海老沢病院で、太郎は、発作が治まれば何事もなかったかのようにだった。検査結果にも、何も現われなかった。前回と同じ。二度目の発作の時も、明彦がそこにいた。

その夕。伽耶子は、友康と明彦を見送ることになった。

長屋門の脇戸を出て、坂を見上げる。昇り切った果てには、空があつて、夕焼けの赤に染まっている。伽耶子の後、門をくぐって二人が出て来た。

「じゃあ」

友康が声をかけた。

「体は本当に大丈夫ですか？」

伽耶子の言葉に黙って肯く。

そして、背を向けて歩き出す段になれば、やはり引き止めるにはいられない。

「兄さんのせいではないんだから」

友康は踏み出した一步を止めて、振り返った。

「それは……」

「私には兄さんの心が見える。兄さんの目に、太郎は映っていない。太郎のことは見えていない」

「そんなことはわかってる。明彦君には看護師も森佐菜子も見えていなかった」

「違ふ、そういう意味じゃない。太郎のあの発作は、兄さんが引き起こしてるんじゃないってこと。太郎の中に、生まれた時の記憶が残っていて、あの時自分に向けられた力を察知してしまうから」

伽耶子の必死の説明に、友康は首を振る。

「明彦君を見ると、発作が引き起こされるのだったら、それは明彦君のせいだ。あの時、赤ん坊を殺そうとしたのは本当のことだ」

言葉が途切れた。

「この家に戻ったのが、間違いだった」

伽耶子の目に、涙が溢れた。

（兄さんを連れて行かれてしまう）

その思いしかなかった。二日前、海老沢病院から、この屋敷に帰って来た。六年も離れていられたことが夢のように思えた。それまで、毎日毎日ここで兄を待って生きてきた。半身だった。どうしても、かたわらに必要な半身だった。

「連れて行かないで」

友康に詰め寄った。

今、ここには、明彦がいる。

明彦は、変わらない。この坂を下って帰って来た。この場所で見えていた。流れるように歩く。しなやかな四肢。なかなかこちらに焦点の合わない双眸。

「お願い」

伽耶子の声は擦れた。伸ばした指先が、微かに明彦の手に触れる。

青い世界があった。いや、もう青いとも言えない。透明度が増して、青かった残像だけのクリアな世界だった。もう碎

けた約束の欠片さえも透き通って、ただ相変わらず、パンドラの箱はそこにある。蓋が閉まっているのか、開いてしまったのかも、見えない。光が多過ぎる。

友康の野太い手が、バランスを失って倒れそうになる伽耶子の細い腕を押さえた。

「葉子さんの最期の言葉を忘れるな」

伽耶子は、大きく息を吸い込んだ。

「忘れるな」

もう一度息を吸う。

友康が手を離すと、伽耶子は口を動かした。

（わかってる）

声にはなっていないかった。

「俺には、明彦。あなたには、笹原を見張れと言った」

伽耶子の目が哀しんでいる。

「見張れだなんて」

「そして、二人を近づけるなど」

「姉さんは、兄さんのことを愛してた。笹原さんのことだつて、大事に思っていたのに」

「……」

友康は、明彦を促して、歩き出した。

二人は、坂道を、赤い空に向かって、昇っていく。

長く伸びて、伽耶子の足元にまで届いていたシルエットも、

二人を追って離れていった。

天空の視界

ユージン・ムーアが帰った後、笹原由宜は、それでもどうにか仕事をこなしていた。

サクヤグループの自社ビル。その最上階。葉子の為に作った天空の居室。深夜、そこで一人になると、由宜には、昼間の自分が別人のように思える。

なぜ、こんな風に立って続けに、透子の残像が自分に迫ってくるのか？ 十六年間封印し続けていたのに。

ほとんど三六〇度の視界が開けている。地平線が丸みをおびて見える。そして、こんな時間でも、東京の空は明るい。

笹原由宜は、眠りそうな目で、それを見ていた。

昼間、どこだかのビル壁に映っていた映画の予告を見た。

こんな風景だった。SFだかファンタジーだかの映画。天使と悪魔が都会の夜のビル街で戦っていた。千切れ飛んだ白い羽毛が、ビルの谷間にフワリフワリと落ちて行く。妙に、目に留まった。

(そうだなあ、真っ暗だったら、あの羽だって見えやしない)

どうして戦っていたのだろう。悪魔と天使は同属であろう。



人間の方が彼らの近さからいったら、余程異質だ。

だいたい、天使と悪魔はどこが違うんだ。腐敗と発酵の差みたいなものかな。菌の繁殖という点では同じでも、人間の役に立つ腐り方は発酵なのだそうさ。益鳥と害鳥。益虫と害虫。なんて人間中心なんだ。

そうか、悪魔と天使は住む所が違うんだ。天国と地獄に住んでいるんだから。

由宜は、ソファにもたれながら、うつらうつら考え続ける。

押入れの中は、暑かったり、寒かったりしただろう。空腹はあたりまえだった気がする。本当はよく憶えていない。

人間の残酷な調理をみていると、自分もこんなもんだつたのだろうと思う。煮立てられた鍋の中、豆腐に頭を突っ込んで暑さから逃れようとする泥鰌。生きたまま油に放り込まれたり、まな板の上でさばかれたりする魚たち。それをさされている側は何もわかつちやいない。

押入れから出ても、初めはぼんやりしていた。柔らかい寝床や、穏やかに胃袋を満たすおかゆ。霞の掛かった頭は、心地よさに浸るだけで、何が起きたのかもわかつちやいなかった。

海老沢病院に、引き取られることになって、家族の食事に加わった日が一番印象に残っている。甘い・美味しい・大量

のご馳走。夢中で食べた。死ぬほど食べた。押さえつけて、引き離されるまで、料理にむしゃぶりついていた。最高だった。

三日も続くと、夢のような食事には、慣れてきた。まわりの言葉も少しずつ理解できるようになってきた。そして、白居嘉一郎のもとへと引き出された。漠然としかわからないはずの人の言葉なのに、嘉一郎の言うことは完璧に理解出来た。『言うことを聞かないと、またお前をあの押入れに戻して、野垂れ死にさせてやる』

恐怖に攫まれた。初めて自分が地獄から天国に助け出されていることに気付いた。

嘉一郎には、いろいろなことを要求された。

『箸を使って物を食べろ』

毎日、豆を摘まんで練習した。

周りの人々が、自分をいかに見ているのかを、理解し始めた。

『小学校に行つて来年中学生になる学力のあることを示せ』

鉛筆を持つ、椅子に座り続ける。それだけでも、筋力のないう体には苦痛だった。ひらがなから覚えた。憶えなくてはならないこと。それは、絶望的な量だった。

嘉一郎のゴリ押しのお陰で、海老沢悠一と同じ中学に進むことが出来た。

『海老沢悠一と同じ高校に合格しろ』

それは、嘉一郎のどんな思い付きから出た言葉であったのか。

中学校で、悠一は、すでに、学年トップの成績だったし、自分は、ペケとも言えない。どうにか体裁を整えただけの中学生だった。とにかく闇雲に努力し続けるしかなかった。

中学生になって、不幸であるということを知った。人の視線がそれを教えてくれる。自分は可哀想な子なのだ。押入れて育ったから仕方がないのだと。臭くても、人の心がわからなくても、礼儀知らずでも、友だちが出来なくても、協調性に欠けても、常識がなくても。

ただ、嘉一郎はそれを許さない。そんな人間は白居家には要らない、もし、まともになれないのなら、押入れに戻れと言う。

サーカスの綱渡りの絵の中で、綱を渡る新米のサルが、タラーリタラーリと汗を流していた。そして、最後の場面で、ついにその緊張に耐え切れなくなつて、落ちて死んだ。

夜中に胃が突き上げられるように痛む日があった。トイレで吐きながら、朝そこに突っ伏したまま死んでいる自分を想像した。

高校受験、発表の日。雪が降っていた。学校から、三々五々分かれて、発表会場へと出かけた。悠一と並んで掲示板

の番号を見た。

(あつた！)

早鐘のように、胸が鳴った。

横を見ると、悠一が俯いていた。

有頂天というのがここにある。

「残念だったね」

自分で声が震えているのがわかった。解放された気がした。飛び回って、笑い転げたいほど、うれしかった。

すぐに、悠一の母が寄って来た。心配で、朝一番で見に来たらしい。当然、二人がやって来てこの結果を見ることはわかっていた。緊張した面持ちで、

「仕方ないわよ、がんばったんだものいいじゃない」

と悠一に声をかけ、

「おめでとう」

と肩を叩かれた。

悠一の母の顔は見なかった。呼び止められても、振り返りもせず、走り出していった。そのまま、海老沢病院に帰ることなく、公園に寝泊りする集団の中にいた。

そうだ、天使と悪魔は住む場所が違う。あの天国は自分の住む場所ではなかった。突然そう気付いた。悠一は試験に落ちても、決してあの天国を追い出されたりしない。毎日強い

られていた緊張は、嘉一郎のせいじゃない。自分に資格がなかった。自分が天国の住人ではないからだ。

再び、混沌の中に落ちた。四年間の緊張が解けて、むしろ心地良かったのかも知れない。言葉のない十一年間、詰め込み続けた四年間。そして、ホームレスとなった。何もしやべらなくてすんだ。可哀想な子でかまわなかった。

半年後、弓子と再会することになる。

それだけなら、良かった。弓子と出会って、透子が生まれるために、あの半年があったと思えれば。

ユージン・ムーアの出現は、どうしても、それきりになっていた研究を思い起こさせる。透子が死ぬ前に、突き止めた遺伝子異常。

手足のないマウスを作り出した実験。

遺伝子異常が原因であると結論づけた。自分の設計図を組み込んだDNA・RNAが壊れていく。たんぱく質の中にあるべき記憶が消えていく。ゲノム解析で、その原因としての仮説を打ち立てた。もう、疑っている時間はない。仮説の証明も実証も必要ない。とにかく、これを信じて……次に、なすべきことは、DNAの記憶を取り戻させるものを、あるいは、せめて崩れさせない何かを見つけなければならない。

(一刻も早く)

時間がなかった。

(早く)

(早く)

(……)

ゲーム・オーバー。

命は失われた。

それきり、一度も透子に關したものは、手にしていない。

十二歳の透子の胸は、膨らみ始めていた。

手も足もなくなって、目も耳も口も失って、透子から何のメッセージも送られて来なくなった。けれど、弓子も由宜も、透子に語りかけた。

(おはよう)

(おやすみ)

(ここにいます)

白い、少女の胸に、指で文字を書いて。

透子の設計図は足を忘れ、手を忘れ、目を、耳を、口を忘れた。細胞は復元されず、体を維持できない。果たして、毎日のメッセージは透子に届いているのだろうか？ 透子の脳は、今も作られているのだろうか？ いやむしろ、混沌の中の方がいい。

もし、あの元気に笑っていたままの透子がこのたんばく質の中に閉じ込められているのだとしたら、その方が耐え難い。少女の感性のままに、音も光も何も認識出来ない世界に延々と閉じ込められているのだとしたら、考えるだけで苦しい。

なぜ、そんなことが起きたのか？

目を背けてきた。

あの浮浪者であった日の記憶から。

ホームレスの中にも、親切で世話好きの人間がいる。寝たり食べたり、どうにか暮らしていた。たまに、仕事もあつた。突然車に乗せられて、大きな施設へ連れて行かれ、掃除や単純な作業をさせられた。なぜ、ホームレスを連れて行くのか、別に考えもしなかった。

ある日、作業中にサイレンが鳴り響いた。普段は、汚いと遠巻きにしている職員に腕を掴んで建物から引きずり出され、そのまま、車に詰め込まれて、もとの公園へ帰された。

その日そこに行ったのは、三人だった。ヤギさんと呼ばれる白い髭のおやじさんが、三日後の早朝路上で冷たくなくなっていた。もう一人は、もう少し若い人で、ごほごほ咳をして具合が悪いと言っていた。そのうちいなくなってしまう。どこか別の公園に行ったのだと思つた。

それだけのことだった。

けれど、マウスの遺伝子異常を作る為に使ったのは、放射線である。

自分の遺伝子も調べた。透子と同じ異常がある。

けれど自分は発症していない。何に差があるのかはわからない。すべて、仮説である。

記憶を頼りに施設を捜した。その後にまた事故を起こし、閉鎖されていた。臨界事故。

由宜は、ソファから身を起こした。立ち上がって、ガラス壁に近付いた。

たんばく質に閉じ込められた透子の魂を思う。

突き立てたナイフは、自分も透子に限りない苦痛を与えた一因だからだ。

天空から地上の明るい夜を見ると、虚しさが突き上げてくる。

このきらめきのために透子が殺された。

すべてを打ち滅ぼしたい衝動が湧き上がる。

すべてを無に返したかった。